都道府県別賞一等

「まさか」の日に見つけた、安心という名の絆

徳島県　徳島県立城ノ内中等教育学校　一学年

池田　文郁

テレビや映画の中の出来事だと思っていたことが、ある日突然、自分の身に降りかかることがあります。

小学五年生の冬、私にとってそれは「母の入院と緊急手術」という現実でした。病名は「たこつぼ心筋症」。強いストレスなどをきっかけに心臓の先端部分が動かなくなり、心臓の形が「たこつぼ」のように変形する病気でした。それは大好きな競技かるた部のある憧れの学校へ、私が中学受験を控えていたまさにその真っ最中のことでした。

忙しい父の代わりに、ケンカをしながらも算数や国語、理科に社会と、ずっと一緒に勉強を教えてくれた母。手術の前日、病院に付き添った父は「大丈夫だから、文郁は心配しなくていい。」と言ってくれましたが、父の必死に気丈に振る舞う姿から、深刻な状況であることが痛いほど伝わってきました。私は大好きな小説を読むふりをしながら、あふれそうになる涙をこらえるのが精いっぱいでした。

そんな不安で押しつぶされそうだった私に祖母がそっと教えてくれたのです。「医療技術も進歩しているし、優秀な先生が担当してくれるから大丈夫。それに、生命保険にも入っているから、治療費もなんとかなりそうだからね。」

そのとき、私は初めて生命保険というものの存在と、その意味を知りました。手術の費用だけでなく、もしも働けなくなったときの生活のことも保障してくれる仕組みがあること。祖母は、子どもの私にも分かりやすい言葉で丁寧に話してくれました。

正直に言えば、その瞬間、私は母の命の心配と同じくらい、これからの生活や私の中学受験はどうなってしまうのだろうという不安も抱えていました。

共働きでなんとか支えてくれていた我が家にとって、大きな経済的負担がのしかかることは想像がついたからです。だからこそ、保険という「備え」があることを知ったとき、心の底から救われたような、深い安心感を覚えたのを今でも覚えています。

その後、手術は無事に成功し、母は長い時間をかけて心身ともに回復していきました。今では大好きな保育士の仕事にも復帰し、私と一緒に二人三脚で受験を乗り越え、私はこうして憧れの中学校に通っています。

『だれが、いつ病気になるなんて分からない』

あの経験を通して、人生には予測できない瞬間があるからこそ、確かな「備え」が必要なのだと強く思い知らされました。

生命保険は、ただいざというときのお金を工面してくれるだけのものではありません。それは、私たちの家族の絆を守り、私の夢へと続く未来をつないでくれたものでした。そして何より、家族と一緒に笑い合える何気ない日常の幸せを、これからもずっと守り続けてくれるものです。生命保険は、いざというときのためだけではなく、こんな当たり前の、愛おしい日々を輝かせるものだと、私は心から思っています。